

近世城跡の神社と顕彰碑

羽賀 祥二（名古屋大学）

1. はじめに

本報告は近世城郭が明治維新後の武士身分・旧城下町の解体過程でどのように変化するのか、尾張・三河両国に所在する城郭を対象に明らかにすることである。とりわけ三河国の岡崎城、徳川家康の拠点であった岡崎城を素材にして、いくつかの論点を提示したいと思う。また、桑名城や高知城を事例として、近世城郭や城跡に建立された神社とその祭礼について、その特徴を考えてみたいと思う。

2. 尾張・三河の城跡

最初に、尾張・三河両国内の近世城郭が明治維新後にどのように変化したのかを見てみたい。尾張・三河両国内に本領地を持っていた大名は、尾張徳川家のほか7家あった。尾張徳川家と三河田原の三宅家を除いて、残りの5家はたびたび領地替えが行われ、領主が変わる中小藩であった。なお、犬山城の成瀬正肥は維新後に尾張藩から独立し「藩屏」として政府から認められた城主である。

表1は尾張の二つの城郭、表2は三河の六つ城郭の変遷を示したものである。名古屋城と吉田城が軍隊の駐屯地となっていく以外の城郭は、廃藩置県直後には天守閣を含め城内の建物が取り壊され、払い下げが行われている。かろうじて天守の保存がなされたのは犬山城であり、名古屋城は第三鎮台の駐屯地となったものの、明治12年（1879）本丸の保存は決定され、後に名古屋離宮となり、帝室財産に編入された。他方では西尾、岡崎、犬山では城跡に公園

表1 尾張国内の城郭の変遷

城郭名	所在地	幕末の城主	石高	維新後の変化
名古屋城	名古屋市中区	徳川義宣	61.95万	1871年金鯱献上 1872年東京鎮台第3分営設置 1873年名古屋鎮第設置 1874年歩兵第6連隊駐屯 1879年城郭の保存決定。
犬山城	犬山市犬山	成瀬正肥	3.5万	払い下げ、天守保存 県立稲置公園となる

表2 三河国内の城郭の変遷

城郭名	所在地	幕末の城主	石高	維新後の変化
田原城	田原市田原	三宅康保	1.2万	1872年建物払下げ決定
吉田城	豊橋市今橋町	松平信古（大河内）	7万	1873年第6師管分営所、1885年第3師団第18連隊移駐
岡崎城	岡崎市康生町	本田忠民	5万	1874年天守以下建物取り壊し、翌年本丸を岡崎公園とする
西尾城	西尾市錦城町	松平乗秩	6万	1872年天守以下建物払下げ。西尾共園となる
刈谷城	刈谷市城町	土井利教	2.3万	1871年御殿・土蔵等払下げ、1874年建物取り壊し
拳母城	豊橋市小坂本町	内藤文成	2万	1871年建物取り壊し

が設置されていった。以上のような維新後の城跡の変化は、①城郭の一部の取り壊し、施設や材木などの払い下げ、②天守閣の保存、③旧城郭内への軍隊の駐屯、④城郭公園の開設、という4点にまとめられる。

城郭、とくに天守閣は近世大名の領域支配の政治的象徴性にほかならない。王政復古という天皇を首長とした新国家の成立後、こうした政治的象徴性は解体されていくことになる。城郭の破却という処置のほかに、名古屋藩（版籍奉還後の正式な呼称）で起きたことは非常に注目される。明治3年（1870）年名古屋藩は名古屋町人に天守閣の拝観を許し、さ

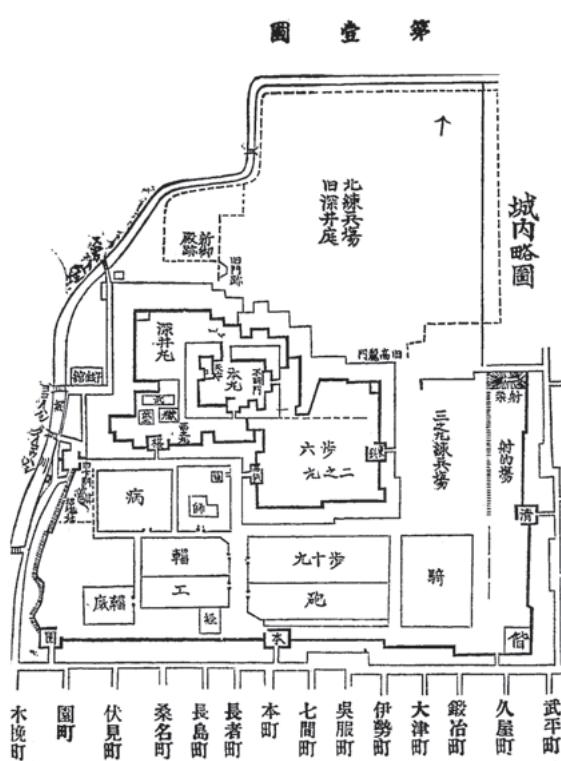


図1 名古屋城内の軍事施設等の配置図
(笠原保久著・発行『金城案内』1892年)

らに廃藩置県後の明治5年（1872）には天守閣の屋根にあった金鯱一対を下げ降ろし、いったんは宮内省へ献上された。金鯱が下ろされた名古屋城天守の同年の写真が現存しているが、まさにそれは領主支配の歴史が終わったことを地域住民に強く意識させるものであったと推測される。

そして名古屋城の変化は城郭内の宗教施設にも及んだ。近世には三之丸に東照宮が配置されていたが、維新後には城郭外へ移転され、それに代わって西南戦争後には第三鎮台の将兵として出征し、戦死した者を祀る招魂社が設置され、その境内には西南戦争の戦歴、戦死者の功績を刻んだ西南戦争記念碑が建立された（図1）。こうして第三鎮台の司令部・兵営が置かれた名古屋城跡は宗教的にも大きく変容したのである。

3. 城郭と神社

全国の近世城郭内には神社が存在していた。たとえば城郭建設当初から稻荷社などがあった例は少な

くない。19世紀前後になると、そうした神社以外に、城郭に由緒がある領主を祀る神社が創建されていくこともあった。三河国田原の田原城には、文化2年（1815）に領主三宅家の家祖とされた、南朝の忠臣、児島高徳を祀る児島社が城内二の丸に建立され、さらに藩祖三宅康貞がそこに合祀された。その後、明治10年（1877）になって児島社は巴江神社と改称された。さらに昭和3年（1928）には社殿は本丸跡に遷座された。

城郭内神社について、もう少し詳しく岡崎城の事例を見てみたい。

岡崎城はいうまでもなく徳川家康が出生した由緒を誇る城郭である。15世紀中期に築城されたといわれ、享禄4年（1531）に家康の父、松平清康が入城した。天文11年（1542）に家康はこの城で生まれ、近世以降「神君出生の城」としてその名を知られることになった。近世に描かれた岡崎城の絵図が幾種類か残されているが、その1枚を見ると岡崎城と城の西側を流れる矢作川、そしてそれに掛かる木橋が東海道も道筋・家屋とともに描かれている。岡崎城の城主は本多氏、水野氏、松平氏、本多氏と変遷した。昭和34年（1959）には天守が3層5階建てに復興され、この岡崎城内にも神社が存在していた。寛永年間には本丸に東照宮が建立され、明和7年（1770）には当時の藩主本多氏の祖、本多忠勝を祀る映世神社が本丸に造営され、東照宮は三の丸に移転されたという。藩祖を祀る神社としては早い事例と考えられる。

維新後には城郭内神社には変化が見られた。明治9年（1876）東照宮と映世神社が合祀され、明治13年（1880）には東照宮の社殿が改造され、さらに大正2年（1913）になると、新たに徳川家康と本多忠勝を祀る龍城神社が創建され、大正3年（1914）県社に列格された。社殿前には大正2年（1913）9月、旧岡崎藩士が寄附して建立された鳥居が立つ。現在の岡崎城天守閣は昭和34年（1959）にコンクリート造りで再建されたものだが、その傍らには同じく昭和39年（1964）に再建された社殿をもつ龍城神社が



図2 岡崎公園の図
（『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第4、1926年）

建っている。

先に触れたように明治7年（1874）天守以下の建物が取り壊され、翌明治8年（1875）本丸跡が岡崎公園となった。岡崎公園では明治43年（1910）に岡崎開府三百年祭が挙行された。その時に発行された伊藤小文司『岡崎案内』は、岡崎公園について次のように書いている。

岡崎公園は同町康生に在り、徳川家康公降誕の旧跡にして、廢藩の後城郭を毀ち公園とす、家康公産湯の井今猶存す、實に三河武士三百年の霸業は此處より勃興せしを想へば、欣快の情に堪へざるものあり、園内東照宮を祀る、社殿清美を盡せり、猶旧城主祖先本多忠勝公を祭れる映世神社（近々社殿新築）は東照宮社内に祭れり、翼館は園の東隅に有る一大会館にして、公私の宴会俱楽部等に使用す、南隅紀念碑は額田郡内戦死者の忠魂を祭れり、其辺傍にある大砲は貳拾参口径拾七珊加農砲なり、日露戦役戦利品にして特に陸軍省より当町へ御下附相成たるものなり、園内数百株の桜樹を植へ、花季には一層の美觀を呈す、遠く尾勢の諸峯を望めば、翠巒（すいらん）双眸（そうぼう）の間に集り、

近く南方に対して是の字寺、六所社の森の佳景眼下に矢作、菅生の諸流を眺むる等、風景絶佳にして、三河屈指の遊園地として、世に著る廃藩後に城郭が破却され、公園として生まれ変わったが、公園内には「家康公産湯の井」が現存し、このわずかな遺蹟から「三河武士三百年の霸業」がここから勃興したことを想起させる。また東照宮・映世神社、近代会館としての翼館、日露戦争後に建立された戦争記念碑、戦利品として展示されたカノン砲など近世から明治末までの諸施設がここには存在していた。しかも岡崎城跡は桜に包まれ、また遠くには尾張・伊勢両国を望み、緑連なる山々が両眼に映る絶景を望む地であり、近くには岡崎町の社寺や矢作川などを眺めることができる風景の素晴らしい「三河屈指の遊園地」として世に知られる場所でもあった。現在の公園内には「家康公産湯の井」跡に立つ昭和8年（1933）建立の由緒碑のほかに、家康の遺蹟として「東照公えな塚」跡の宝塔（建立年不明）、「人の一生は重荷を負て遠き道をゆくがごとし」という言葉を刻む「東照公遺訓」碑（昭和11年（1936）4月建立）がある。

岡崎城跡の施設の配置は『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第4（1926年）に掲載された「岡崎公園之図」で確認することができる（図2）。天守跡の東に龍城神社（大正4年（1915）創建）と翼館、南に戦争記念碑があり、二の丸には大正11年（1922）城跡内に移転された岡崎図書館（1912年仮開館、1916年岡崎市立図書館として開館）があった。

こうした来歴がある岡崎城にとってもっとも大きな出来事が大正4年（1915）年に挙行された岡崎開府三百年祭であった。その祭典の準備から祭典の内容などは『家康忠勝両公三百年祭紀要』に詳しく記述されている。祭典は4月16日から18日まで3日間にわたって挙行された。「新しき試みがあらゆる方面」で実行された祭典だったという。忠勝の三百年祭は明治43年（1910）であったが、延期されて大正2年（1913）に執り行われることになり、明治天皇の死去によって再延期され、大正3年（1914）も昭

憲皇太后の死去で中止され、ようやく大正4年（1915）に祭典総長は岡崎藩出身の陸軍大将土屋光春、副総長は同じく岡崎藩出身の地理学者志賀重昂に決まった。この年は家康の三百年忌にあたっていたため、それまで無格社であった映世神社を龍城神社と改称し、県社に列格された。その際本殿・拝殿を本多家より1万円余の寄付を受けて新築し、いまだ祭典もなかつたので挙行した。

志賀の談話によれば、明治時代の本多家は貧困で、華族間の交際にも差し支え、旧藩士の多門伝十郎が財政整理にあたったという。そして本多家の財産が百万円になった時には祭典を挙行しようと計画していた。今二百万円に達したので、忠勝は桑名で死去したので桑名の寺で仏事をし、慈善・教育事業に寄付する一方、岡崎では祭典を挙行するために旧藩士など千名、旧領内の小学校生徒一万五千名へ本多子爵の名で案内状を出した。これも新式の方法だったという。本多子爵家は、「偉人追慕の観念を助長すると共に一面公徳心と海外的思想を養成せん目的で、頗る有意味の祭典を行つた」と、『家康忠勝両公三百年祭紀要』は祭典を総括した。

祭典の第1日の4月16日には例祭が執行され、幣帛供進使は愛知県知事松井茂の代理、額田郡長吉川一太郎が務め、本多子爵、土屋祭典総長、旧藩士らが参列した。そして岡崎市民三万五千人余りが祭典を協賛した。

そしてこの日市内では提灯行列が行われ、軍楽隊に演奏で1万5千人に生徒学生・青年会員が行進し、また公園内には幾百の大電灯、イリュミネーションで飾られ「不夜城の如し」であったという。この祭典の際に志賀重昂は「三河武士」と題して、「一 産声高く打ち揚げて／天下の百獸皆震ふ／十万三河の美少年／誰ぞ当年の寅童子」、「二 唐の頭に蜻蛉切／天下の群豪皆おそる／十万三河の美少年／誰ぞ当年の平八郎」という歌詞を作った。志賀は豪勇無比の本多平八郎忠勝を三河人の模範として表彰しようとした。

祭典は「新しい試みがあらゆる方面」で示したと

評されたが、その試みの一つが国際的視野から祭典を位置づけようとしたことであろう。現在、岡崎公園の本丸内に一基の記念碑が立っている。碑文は志賀が書いたもの（大正3年（1914）7月付）だが、それには次のようにある。

三州長篠古戦場鳥居強右衛門ノ墓畔ニ二石ヲ
獲、一ヲ米国テクサス州殉難烈士ノ碑ニ充テ、
一ヲ龍城神社ニ奉納ス、鳥居ノ忠烈ハ當時我ガ
兩公ノ嘉ミサセラレタル所ナレハナリ

アラモの戦いは1836年テキサス州サンアントニオのアラモの砦で、砦を包囲するメキシコ軍とテキサスの独立をめざす守備隊との間で戦われた戦闘である。志賀はこのアラモの戦いと、武田勝頼軍に包囲された徳川方の奥平貞昌の長篠城での籠城戦を重ねて見ていた。そして志賀は、武田方の包囲網を突破して岡崎の家康の救援を求める、帰城後に捕まつて磔の刑に処せられた「英雄」鳥居強右衛門とアラモの戦いの犠牲者を顕彰する記念碑の建立を志していた。大正3年（1914）10月には鳥居の磔碑が長篠城跡の近くに建立され、同じ年9月にはサンアントニオにアラモ砦記念碑が建立された。

志賀はこの祭典の中でもアラモの戦役記念展覧会を開催し、早稲田大学教授H.A.コックスに依頼して、「家康公と日英の関係」と題する講演会を開いた。

近代城跡は何れの地でも少なからぬ記念碑が建てられる場所だった。慰靈と顕彰の空間であった。こ



図3 岡崎公園内の「忠義護邦家」碑

の地図にある戦争記念碑は日露戦争後直後の1906年に建立されたもので、戦争記念碑としては特徴あるデザインの大きな記念碑である。基壇の上に三層の石積みの構造をなし、その頂上部には地球儀と戦勝のシンボルの鷹が載せられている。世界に冠たる帝国日本の勝利を表したものだろう。記念碑本体には元帥・侯爵山県有朋が書した「忠義護邦家」という文字が刻まれている（図3）。そして周囲の三面には西南戦争、日清戦争、日露戦争において額田郡出身の戦死者の階級・姓名が刻まれている。また記念碑の前には明治39年（1906）2月に献納された「日露戦役紀念」と刻んだ灯籠一対がある。これは「天台真言曹洞報国会」という団体が寄進したものだった。

この「忠義護邦家」碑は日露戦争までの三つの戦役の戦死者を顕彰する記念碑であったが、この記念碑より前日清戦争後にも「忠義護邦家」碑が存在していた。この記念碑は日露戦争後の記念碑と比較するとたいへん小ぶりで、倒れるような形で日露戦争記念碑の側らに現存している。この日清戦争後の「忠義護邦家」碑は明治31年（1898）9月に建立されたもので、西南戦争と日清戦争の戦死者を顕彰するために建立された。そのいきさつは同じ場所に現存する由来碑によって明らかになる。額田郡長針谷重懋による撰文（明治31年（1898）9月付）には次のようにある。

忠義護邦家之碑者、全郡合資以建之、碑石本郡產出青花崗岩、而周囲累石係町村寄附、斯碑不啻征清及西南之役、苟将来捧身邦家者可皆班列、斯碑今記其建碑之起因、併書関此事委員姓名云爾

これによれば額田郡内の町村の寄附金で建立された「忠義護邦家」碑は、将来の国家に身を捧げた忠義者を班列するという意図をもって建立された。そしてそれ以前の戦役とは比較できないほどの戦死者を出した日露戦争後、その犠牲に応えるにふさわしい規模で記念碑も新造されたのだった。

この岡崎公園が東照宮以来の歴史的遺蹟であった

と同時に、額田郡における社会的功労者を顕彰する場所であったことは、この「忠義護邦家」碑の建立で明らかである。またこの記念碑以前に、こうした社会的功労者の顕彰が公園という場で行われていた。こうした顕彰という行為が「公」を表象していた。二の丸には明治18年（1885）4月に建立された「興利除害」碑（明治18年（1885）4月建立）がある。この記念碑は額田県の区長や愛知県属、さらに宝飯郡長を務めた竹本元僕（天寧）が明治15年（1882）の乙川水害後、水路を開鑿するなどして治水に功績があったことを表彰するものだった（額田郡長針谷重懋撰文、從五位三島毅題額）。

4. 城郭神社と祭礼 I

一松平定信と武備祭

ここでは近世の城郭内に創建された神社とそこで執行された祭礼について検討したい。第一の事例は白河松平家の鎮国大明神である。

天明4年（1784）10月28日、白河藩主松平定信は陸奥国白河城の三ノ丸北小路山に藩祖松平定綱（謚は「鎮国公」）の木像を祀る社を創建した。定綱は寛永年間伊勢国桑名に移封されたこともあり、定信は家臣を桑名の長寿院に派遣して調査させ、そこに伝来していた木像を移転して、白河城内に祀ったのである。そして寛政4年（1792）に「鎮国大明神」という神号を奉った。この鎮国大明神の前で毎年春秋・8月のうち忌日には武備祭が執行され、弓馬剣槍炮の武芸が奉納された。そして蝦夷地におけるロシア側の攻撃が深刻化していた時期、それに対処するために文化5年（1808）8月には藩士に甲冑を帶することを命じた。これは「大御祭事」と称された。この文化5年の祭事を含め、その後の祭事の際の藩士による行軍式の図は西尾市岩瀬文庫に残されている。

藩祖定綱を祀る鎮国大明神に統いて、松平定信が自らを神格化する作業を行った。定信が40歳の頃、自身の木像を鎮国大明神の靈廟に安置し、さらに江戸下屋敷の浴恩園にある感應殿にも木像を安置し

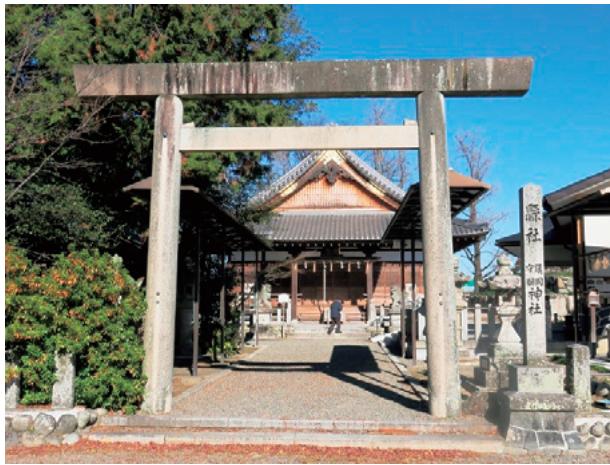


図4 九華公園内の鎮国守国神社

た。定信存世中であったことから、この木像安置という行為は「生祠」の誕生であった。渋沢栄一は『樂翁公伝』で、「公は死後神となって國を守るという意志がある」と指摘したが、すでに生前から神格化されようとしていた。文化4年定信は遺書を書き、それを封書して残した。そこには死後には「謚は守国院と称すべし」と記されていた。文政3年（1820）8月定信が書いた『自書略伝』には、「我十二歳の頃より、生れは天下の為に忠を盡し、死ては忠義の鬼とならむことを思ひ立て」とあり、「追つて守国大明神の号を京都より請うべし」との意思を示していた。

松平家は文政6年（1823）白河から伊勢国桑名へ転封された。白河の定信の木像は桑名城内の朝陽山に移された。松平家は定信の意志に従って、文政12年（1829）の定信の死去後、京都の神祇管領家吉田家と交渉し、天保4年（1833）11月吉田家は定信に「守国靈神」の神号を与え、翌年4月には「守国明神」の神号へと昇階させた。吉田家は豊臣秀吉に「豊國大明神」の神号を授与した神祇管領家であり、近世を通じて大名などに「靈神」号、「明神」号を授与する宗教的権威を有する家であった。さらに安政2年（1855）12月には「守国大明神」の神号を受け、桑名朝陽山では定信の神像を鎮国大明神の神廟に合祀したのである（図4）。

なお維新後には長陽山の廟は「鎮国守国神社」と

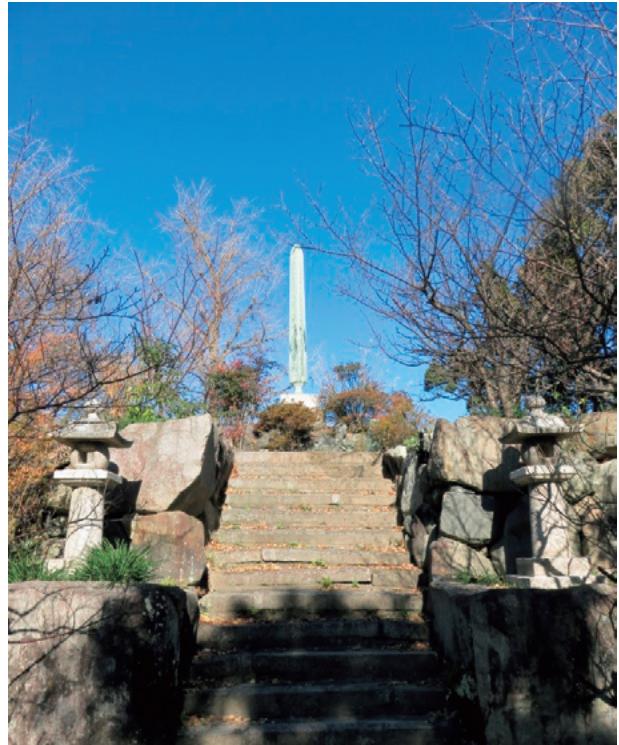


図5 九華公園内の「旧桑名藩士民招魂碑」

表3 九華公園内の神社・記念碑

名 称	建立年月	由 来
鎮国守国神社		1880年県社列格
九華招魂社	明治9年 (1876)	戊辰戦争から太平洋戦争までの「護国の靈」を祀る
鎮国（宮光）稻荷大明神		藩祖松平定綱が本城鎮護のために勧請
高龕（たかおかみ）神社		定綱が祀る鎮護の水神
（戊辰殉難招魂碑）	明治20年 (1887) 12月	銅碑・鎧型デザイン、旧桑名藩士民の招魂碑
「紀念碑建設義捐姓名」碑		招魂碑建立の義捐金拠出者414名の名を記す
「精忠苦節」碑（「桑名藩士森君□□の碑」）	明治23年 (1890) 2月	戊辰戦争で最後まで戦い、自害した森陳明の顕彰碑

称され、明治13年（1880）10月には県社に列格された。一方、白河では大正11年（1922）定信の靈を祀る南湖神社が創建され、翌年5月県社へ列格された。

ところで旧桑名城跡は昭和3年（1928）定信百年忌に際して九華公園として整備されたが、現在、表3のような施設が存在している。ここで注目されるのは旧桑名藩の戊辰戦争に関する記念碑が存在していることである。戊辰戦争から20周年にあたる明治20年（1887）には鎧をデザインした銅碑「戊辰殉難招魂碑」が建立され、それは旧桑名藩士民の戦死

者を招魂し、慰靈する記念碑であった（図5）。その側らにはこの招魂碑建立に際して義捐金を出し協力した414名の名を記した「義捐姓名碑」もある。さらに桑名藩の戊辰戦争への参戦を象徴する人物として森陳明の顕彰碑も明治23年（1890）に建立されている。こうして桑名城跡は旧領主を神格化した神社に加えて、桑名藩に功労のあった戦死者を慰靈、顕彰する施設が置かれ、後に公園となった旧城跡の主要な施設となつたのである。

5. 城郭神社と祭礼Ⅱ —高知城と藤並宮

城郭神社において挙行される祭礼として、もう一つ高知城内の藤並宮の事例を取り上げてみたい。

藤並宮は土佐藩の藩祖である山内一豊、その夫人見性院、第二代忠義を祭神とする神社である。藤並宮が創建されたのは文化3年（1806）10月のこと、一豊の死後200年に当たっていた。すでに城内には八幡宮があり、藤並宮の社殿はこの八幡宮の建築に倣って建立された。別当遍明院、神職宮地豊前はいずれも城内八幡宮の関係者であった。

創建の前年、文化2年（1805）閏8月5日の藩の触には、「一豊公尊靈此度神社ニ御祝被遊、於京都吉田勧請相済、御当地へ御迎被成、明後六日御神靈御下向之御趣御左右相達候」とあり、京都の神祇管領家吉田家から神号「藤並明神」が授与され、一豊の神靈が高知に勧請されたのである。



図6 高知城追手門脇の藤並宮
(高知市初等教育研究会編『高知読本』より)

天保期に入って、藤並宮には大きな変化が現れた。天保6年（1835）8月に「藤並明神」から「藤並大明神」へと神位の昇格があり、それを祝つて翌7年2月25日から27日まで三日間にわたり祝祭が執り行われた。城下の南馬場の外に御旅所が建立され、また藤並宮への高知の住民の参詣を許し、高知及びその周辺の町・郷・浦から練り物が繰り出された。そしてこの年の9月25日から27日まで藤並大明神例祭が行われた。高知城内に新たに春日大明神の社殿が建立され、御旅所へ両社が神幸する祭礼が実施されるようになった（図6）。そしてこれが以後の高知における重要な祭典となつた。

もう少し詳しく藤並大明神の祭礼を見てみよう。その祭礼の様子は『天保七年藤並宮御旅所御神幸記録』に着色された図として描かれている。御射場では「奉獻藤並大明神宮」と書かれた幟が何本もなびき、その前で騎馬武者の射礼の行事が実施されている。また御旅所へ神輿を運ぶ行列図もあり、各町郷浦からの出し物が詳しく描かれた。

9月25日には城北の御射場への神幸があり、射礼が執行された。26日には春日大明神とともに藤並大明神の御旅所への神幸が行われ、町郷浦から行事役が勤め、住民が神幸行列の道具持ち、旗・太刀・鳥毛・傘・幣帛・弓・獅子頭・鼻高（天狗面）・鎧武者・法螺貝・太鼓などで「地練類」を出すことが藩から命じられた。まさに高知城内外の領民を動員した祭礼であった。この例祭の他に、藤並宮御旅所では藩領全体の安穩を祈願する祭礼がなされるようになった。藩は天保7年（1836）10月20日の触で、26日から28日まで藤並宮御旅所へ八社（比島神明宮、城内八幡宮、一宮、天王宮、長浜若宮八幡宮、朝倉本丸宮、潮江天満宮、朝峯神社）の神靈を招き、天氣和順・国内安寧・五穀成就・漁商業繁栄の祈祷を執行することを命じた。こうして高知城内に建立されていた藤並宮・城内八幡宮は領主支配を安定化させるための宗教的権威として作り出されたのである。

6. むすびに

近世城跡は明治維新後、陸軍省の管轄に移され、内部の諸施設は取り壊され、あるいは売却されることも多かった。しかし城跡は都市内における広大な空間であったため、軍隊の兵営、学校、病院、その他の公共施設がそこに配置されることになった。また旧城下町や城郭に関する記念日をきっかけにして、都市公園として市民の遊楽・観光の場として整備されていった。こうした公園はまた旧城下町住民や旧領地であった地域社会が、何らかの記念日や歴史記念碑を媒介して、地域の過去を回想し、歴史意識を活性化させていく最大の拠り所ともなった。他方では、近代都市の中核としての城郭公園は戦死者を追悼する場でもあった。西南戦争以後日露戦争に至る各戦争での戦病死者を慰靈する記念碑が建立され、城郭公園の主要な施設として現存している。

しかし、近世城郭は19世紀に入ると、大きな変化を見せていました。藩祖を神格化した神社が創建され、領民を巻き込んだ祭礼を執り行う事例が出現するようになった。城郭内の創建神社は藩主の領内支配のための新たな宗教施設として創り出された。藩祖を祭る創建神社は領主支配の始原へと藩士・領民を向かわせ、こうした歴史意識の活性化を通じた支配の安定化を図ったのである。それは近代における種々の創建神社の起点となり、都市住民の祭典として展開されていくことになった。

もちろん廃墟となった近世城跡もある。そこから近代日本人のもつ抒情性が紡ぎ出された。たとえば土井晩翠作詞、滝廉太郎作曲の「荒城の月」はその典型であろう。

- 一 春高楼の花の宴／巡る盃影さして
千代の松が枝分け出 でし／昔の光今いづこ
- 二 秋陣営の霜の色／鳴きゆく雁の数見せて
植うる剣に照り沿ひし／昔の光今いづこ
- 三 今荒城の夜半の月／変はらぬ光誰がためぞ
垣に残るはただ葛／松に歌ふはただ嵐

四 天上影は変はらねど／栄枯は移る世の姿

映さんとてか今も尚／ああ荒城の夜半の月
城の歴史において輝いてきた過去の栄華は、時代とともに失われた。かつて城が発してきた「光」はすでに、それを取りまく自然の情景のみは変わらない。こうした叙情歌が近代日本人の歴史意識の下敷きとして存在することは確かなことだろう。

【参考文献】

- 1) 平井聖監修『図説日本城郭大事典』全3巻、日本図書センター、2000年
- 2) 愛知県編・発行『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第4、1926年
- 3) 同上『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第9、1933年
- 4) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史』通史編近代I、愛知県、2016年
- 5) 小西四郎編『錦絵 幕末明治の歴史』6 文明開化、講談社、1977年
- 6) 笠原保久著・発行『金城案内』1892年
- 7) 田原町史編さん委員会編『田原町史』田原町教育委員会、1978年
- 8) 嶺山会編・発行『遺芳帖』1910年
- 9) 柴田顕正編『岡崎市史』第2巻、岡崎市、1926年
- 10) 伊藤小文司『岡崎案内』岡崎案内発行所、1910年
- 11) 岡崎市編・発行『岡崎城』2013年
- 12) 家康忠勝両公三百年祭事務所編・発行『家康忠勝両公三百年祭紀要』1915年
- 13) 松平定信『宇下人言 修行録』岩波書店、
- 14) 渋沢栄一『樂翁公伝』岩波書店、1937年
- 15) 『桑名藩行軍図』文化5年(1808)2月(西尾市岩瀬文庫所蔵)
- 16) 桑名義塾編『鎮国守国両神公御遺事』岩尾惇忠、1894年
- 17) 高知市初等教育研究会編『高知読本』高知市教育会、1935年
- 18) 吉村淑甫編『天保七年藤並宮御旅所御神幸記録』高知市民図書館、1988年